

もっと知りたい ふるさと

29

「矢代宿」 宿場町の悩み

屋代は、慶長十六年（一六一

一）に、松平忠輝とその付家老五名の連名で出された「傳馬宿書出し」により、北国街道の宿駅となった。これによって「矢代宿」が成立して、現在の屋代の基礎が形成されたのである。

宿駅となる以前は「屋代」と書いていたが、なぜか「矢代」という文字が使用されている。しかし、その理由は全くわからない。

また、矢代宿の間屋の記録には、「最初は散村であって、軒並びにはなっておらず、約十年たつてようやく『山王宮』付近だけ形が出来てきた。これが本町であり、新町は更に約三十年かかって、宿場が形成されていった」と記載さ

れている。

本陣の家系にある柿崎多膳が江戸末期に書き残した『屋代記』によると、この矢代宿の最大の悩みの一つに火事を上げることが出来る。

藁葺の屋根、軒並びの住居、消火用の水が少ないこと、未熟な消火技術等から何回も火事になったことがわかる。

その一 延宝五年（一六七七）七月、本陣が焼失した。それから四十年ほど過ぎた享保二年（一七一一）三月、また焼失した。その折には大金を賜り普請し、座敷も作っている。更に、明和三年（一七六六）の矢代宿大火で類焼し、自普請をしたが、文政六年（一八一八）には大改築し、殿様が宿泊できるようにし、それから

は加賀宰相様が泊まる御旅館になった。

その二 生蓮寺は、元禄十六年（一七〇三）近辺より出火して類焼してしまつた。その後、明和三年宿中焼失の時にも類焼してしまつた。そこで、一

重山の麓へ寺を移したが、文政九年（一八二六）には、庫裏ばかりを焼失してしまつた。本堂は瓦葺の屋根だったので残つたのである。

その三 明和三年には宿中が類焼してしまつた。その日に、杭瀬下村の勝徳寺及び村方百軒ほどが類焼してしまつた。

その時、矢代宿では、山王宮本社拜殿は残つたが、神主の家は燃えてしまつた。高見では傳左衛門という者の家一軒が残つた。理由はその年に祭礼である「一つ物」を請けていたので、神徳だと言われたと伝えている。

その隣は兵七といい、その時土蔵を造つており、普請してまだ泥土が乾かなかつたので残つたのである。

その日、出火最中に加賀様が御通行で、当宿で昼休みと決めてあつたが、出火のため篠ノ井の唐猫神社に暫く待つていた。しかし、なかなか鎮火しないので、西裏通りを御馬で、ご本陣の柿崎源左衛門がご案内をして小島村



須須岐水神社境内にある秋葉神社

までお連れした。両組のお百姓へ金二十両下され、ご本陣と問屋へも二十両を下さつた。

この他に、天明六年（一七八六）朝火事、同年薬王院の

火事、安永年中の落雷による火事、寛政十一年（一七九九）の火事、文化四年（一八〇七）夜の火事で五、六軒焼失、文化十二年（一八一五）夜火事で数十軒焼失等々、三十件以上に及ぶ火事の記録が『屋代記』に記載されている。

以上から、矢代宿では、大きな火事が三十件以上もあり、被害が大きかつたことがわかる。当時の消火技術が未熟だったたり水を掛ける技術が乏しかったことによる。宿場の住民は、瓦葺の屋根にする、土蔵造りの家にする、卯建をあげる、川べりには秋葉神社を祀る等、色々な工夫をしていた。

屋代公民館長 中村 寛



矢代宿「善光寺道名所図会」より